

お名前	性別	満年齢	終戦時の年齢	現住所
あおやま もり お 青山 盛男	男性	93歳 H27.8.15 現在	23歳	東栄町

## 「天山」(艦上攻撃機)と共に南洋へ

私は、昭和17年(1942)20歳の時に海軍へ志願しました。早稲田大学の夜学で鉱山科を卒業しましたが、昼間は自動車整備の仕事をしていました。車といっても、当時はシボレー、フォードが少しあった程度でした。故障するとエンジンを分解し、修理していました。そんな折に、飛行機整備兵の募集があり志願したのです。エンジンの整備ができる人は少なかったためか、軍隊に入っても配属に恵まれたように思います。同期の多くは陸軍に入りましたが、自分は扁平足で、水泳に自信があったので海軍を希望しました。

すぐに横須賀にある海兵団に入隊し、基礎訓練を受けました。次に神奈川県にある相模野海軍航空隊の飛行機整備学校へ入り、2ヶ月ほど旧型の機材を使った整備術を学びました。海軍の訓練は厳しく、ちょっとしたことで連帯責任で、罰として櫂の棒で尻を殴られたり、ビームという梁に手の皮がむけるほどぶら下がったりしました。そこを卒業すると、霞ヶ浦の近くにある土浦海軍航空隊に入り、実戦配置となりました。ここは、霞ヶ浦へ魚雷で攻撃する訓練をする練習航空隊(教育部隊)でした。さらに、静岡県島田の金谷航空隊で練習機を整備しました。その飛行機も、太平洋へ魚雷攻撃する訓練をするのが目的でした。

### ○ トラック諸島へ

訓練を終え、山口県岩国へ行きました。そこで第3航空戦隊が編成されました。改造された航空母艦(空母)が隼鷹、飛鷹、龍鳳の3艦あり、私は隼鷹に乗りトラック諸島へ配属されました。

昭和18年(1943)3月27日出港、空母隼鷹でトラック島の春島へ到着するのに1週間かかりました。トラック島には昭和17年8月から19年2月まで、連合艦隊司令部が置かれ、連合艦隊の艦船が結集していました。戦艦「大和」と「武蔵」が同時に停泊したこともあり、トラック諸島は、春島、夏島、秋島などの名前がついており、夏島



トラック停泊中の「大和」と「武蔵」 1943年撮影 大和ミュージアム提供

に司令部が置かれていましたが、私は航空基地機能が集中している一番大きな春島に約9ヶ月いました。当時は、二日に1回ぐらい豊橋から飛行機が飛んで来て、軍事郵便を運んでくれていました。連合艦隊の司令部があったからだと思います。そのため、家へよく郵便で送ることができ、椰子の実を送ったこともあります。

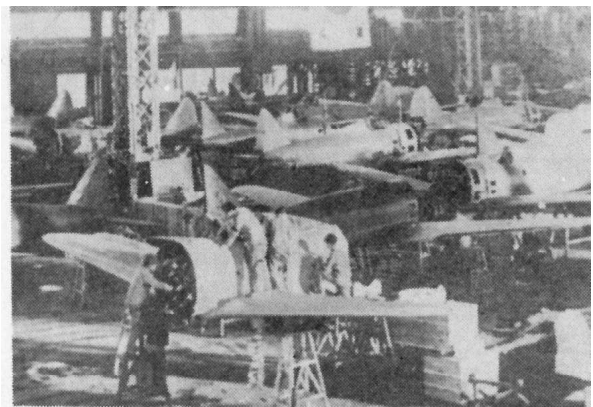
私がいた頃のトラック諸島には敵の攻撃は一度もなく、平和そのものでした。毎日スクールがあり、天山の翼の下に飛びこんだり、裸になって風呂代わりに浴びたりしました。また、司令部のあった夏島には、よく食糧調達に行きました。その時には、みんな階級章をはずしました。買い物は列をつくるほどのにぎわいでした。日本人が多く住んでいて、町の中心部には映画館から商店街、神社、学校、病院や慰安施設などもありました。日本語を知っている現地人もいました。大正時代に日本の委任統治領となり、民間人や軍人など約2万人が暮らすようになったからです。対日感情もよく、何でもよく言うことを聞いてくれました。

### ○ 「天山」の整備が任務

私はトラックの春島で、「天山」艦上攻撃機を整備し、飛ばしていました。トラックにはたくさんの飛行機がありましたが、自分の飛行機がだめになると他の飛行機の整備をするということはありませんでした。エンジンの構造が異なることもあり、分担が決められていたからです。

天山は、愛知県の半田で製造された大きな飛行機で、1トンの魚雷を搭載でき、2人か3人が乗りました。実戦配備されたばかりの性能のよい艦上攻撃機でしたが、まだ数が少なかったのです。

飛行機の整備は、とても厳しいものです。戦闘機には操縦士が乗りますが、大勢の整備兵が各機ごとに専任配備されて、初めて飛べるのです。戦闘機が闘うためには、それ以上に多くの整備兵が必要です。1機ごとに機付兵が6名程度配置され、整備する場所も決められていました。他の飛行機や機材を担当することはありません。それだけ多くの計器や武器があるからです。そのかわり、一人でその部位の整備をすべて任されるのでとても気を遣います。機体、エンジン、操縦系統、脚部、燃料系統というように分担されていました。私はエンジンでしたが、当時は現在のような進んだ資材もありません。分解すると大変な数の部品になり、それを洗浄し、元通りに組み立てるわけですから、部品管理が大変です。整備作業の時は、とても忙しいので操縦士、搭乗員や上官と話をすることもありませんでした。ですから、当時の正確な戦況を知るよしもありませんでした。



中島飛行機半田製作所 1942-43 竹中氏HPより

## 艦上攻撃機「天山」

艦上攻撃機とは、航空母艦に搭載して運用する攻撃機のことです。天山は、日本海軍が九七式艦上攻撃機の後継機として中島飛行機が開発し、1943年7月に実戦配備した艦上攻撃機です。艦船攻撃には魚雷攻撃と急降下爆撃が有効とされ、魚雷攻撃をする艦上攻撃機は雷撃機と呼ばれました。天山は、重い魚雷を搭載する



艦上攻撃機「天山」 絵：小池繁夫氏

能力があり、当時の最高性能を誇っていました。しかし雷撃機は、海面すれすれを飛び目標艦船に低空でぎりぎりまで近づくことが必要なので、敵方の激しい対空砲火と護衛戦闘機の攻撃にさらされるという性格を持っていました。

昭和19年（1944年）3月に正式採用され、実績としてはブーゲンビル島海戦、マリアナ海戦ころから主力艦攻となりました。ライバルのグラマンに対し、速力航続力があるに優れ、同時機の各国の攻撃機の中でも最高性能を誇る3座艦上攻撃機でした。しかし、実戦に投入されたころには米軍艦隊のレーダーなどの対空攻撃能力が増強されており、高性能の「天山」をもってしても日本海軍の雷撃隊は相当な被害を被りました。

生産機数は試作機を合わせ1274機が作られ、後には電探を装備し夜間攻撃も可能となりましたが、航空母艦が壊滅状態となって陸上基地からの運用が中心となり、最後はむなしく特攻機となって消えていきました。

### <おもな性能>

全長 10.78m 自重 3,010kg 最大重量 5,200kg  
最高速度 481km/h (高度4,000m) 上昇限度 9,800m  
航続距離 1,743~3,042km プロペラ 定速4翅  
エンジン 「火星」25型 空冷14気筒 1,850馬力  
乗員数 3名 総生産機数 1,268機 (全タイプ計)

<参考：ウィキペディア等>

## ○ 山本五十六司令長官の死

トラックにいた時の大きな出来事は、山本五十六長官が撃墜死されたことです。昭和18年（1943）4月18日、監視のためにラバウル上空へ行った時に、アメリカ軍戦闘機に撃墜されたのです。公式には発表されませんでした。トラックの兵士の間ではうわさがあったという間に広まりました。後で知ったことですが、戦況が大きく変わったのは、私たちがトラックへ行く前年の昭和17年6月5日のミッドウェー海戦で、暗号を解読され、主力空母4隻と多くの戦闘機を失ったことです。山本五十六司令長官が亡くなったのも、暗号を解読されていたのが原因でした。そして、日本の制空権が次第に狭められていくこととなります。

いつ頃だったか覚えていませんが、私が受け持っていた天山雷撃機が出撃して戻

らなくなりました。天山がなくなると、他の飛行機を整備することはできず、トラックにいても何もできないので内地に帰ることになりました。ちょうどその頃、戦艦大和が日本へ戻ることになり、私は大和に便乗し昭和18年（1943）12月12日、トラックを出発し、17日に横須賀に到着しました。

平和そのものだったトラック諸島は、私が日本に戻った2ヶ月後の昭和19年2月17日、大空襲にさらされ、兵士や民間人7000人以上が亡くなったそうです。連合艦隊が退却したすぐ後のことで、見捨てられたような形で退避できなかった人たちが犠牲になったそうです。知り合いになった人たちの顔が思い浮かびましたが、安否を確認することはできず、ただ無事を祈るばかりでした。

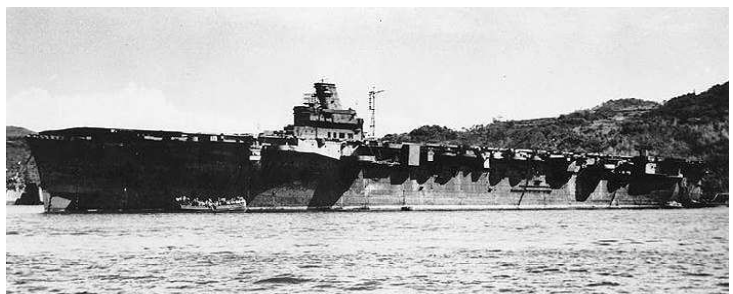
## ○ マリアナ沖海戦のこと

昭和19年（1944）5月、呉で修理を終えた隼鷹で再び、大分県佐伯湾を出航しました。6月になって、フィリピン諸島の中部にあるギバラスに入港し、1週間ほど停泊しました。そして6月19日から始まったマリアナ沖海戦（「あ」号作戦）に参戦し、初めて空母から天山を出撃させました。私が整備する天山は、抱えた魚雷の重みで海面すれすれまで下がりながら出撃していきました。しかし、この頃は米軍のレーダーや迎撃機の性能も向上しており、戦艦や空母まで近づいて爆弾を落とすことは難しくなっていました。天山艦攻だけでなく零戦などの戦闘機も二十機ぐらい飛び立っていきましたが、船に戻って着艦した飛行機は1機もありませんでした。飛び立てば帰ってこれないので特攻機のようなものでした。たとえ戻ってきても着艦することはできませんでした。というのも、空母の多くが沈没か大きな被害を受けたからです。何ともおとましいことでした。

隼鷹には、煙突付近に爆弾が2発命中しました。自分は甲板の下にある格納庫にいたので戦闘の様子は分かりませんでした。しかし、「ドカーン」という大きな音とすごい衝撃があったので、やられたと思いました。幸い沈没はまぬがれましたが甲板は大破し、大勢の兵士の死体が散乱していました。私は死体を片づけることはありませんでしたが、監視のために飛行甲板に行くと、内臓や腕が飛び散っていました。誰のものか分からないほど飛び散った死体の間を、踏み分けながら歩きました。遺体は後で確認され、水葬で海に沈められました。

隼鷹は発着艦が不能になりましたが、幸い航行することは可能でした。巡洋艦に曳航されて沖縄の中城湾に入り、7月3日に命からがら呉に帰ることができました。

このマリアナ海戦で、日本海



空母「隼鷹」 1945.11.1撮影 ウィキペディアより

軍は空母と搭載機のほとんどを失う壊滅的敗北となりました。マリアナ諸島の大半はアメリカ軍が占領することとなり、西太平洋の制海権と制空権は完全にアメリカの手に陥ちてしまったのです。マリアナ海戦は、私にとって唯一の交戦体験となりましたが、この時もはや日本に勝ち目はないと感じました。天山や他の戦闘機はほとんど全滅、他の空母や戦艦も沈没したことは分かりましたから。もし隼鷹が沈没していたら、私の命もここで尽きていたはずです。

### ○ 半田で終戦に

日本に戻ってから、3ヶ月後の10月23日からレイテ沖海戦がありましたが、戦闘機の護衛がない日本の艦隊に勝ち目があるはずありません。戦艦武蔵をはじめ多くの艦船が沈没し、特攻というとんでもない作戦が開始されました。

私の本隊は厚木の飛行学校にあり、そこで整備訓練をしていましたが、この頃には内地でも実戦訓練ができる戦闘機は少なくなっていました。そこへ昭和19年12月7日、東南海地震(M8.0)がおきました。飛行機製作所が破壊され、飛行機が作れなくなったと大騒ぎになりました。すぐに半田の中島飛行機半田製作所へ修理する監督をするために10人程で行くことになり、乙川へ移りました。戦後の記録では、中島飛行機の従業員が153人が死亡となっており、大きな被害があった地震だと分かりました。

昭和20年3月頃、アメリカの沖縄上陸に備えて、半田から松山飛行場へ行き、残っていた天山を2機沖縄へ向けて飛ばしました。再び半田に戻り、従業員の監督をしていましたが、そこで終戦になりました。

### ○ おもな軍歴

昭和17年(1942)4月	海軍志願、海軍入隊 横須賀海兵団入隊 相模野海軍航空隊、土浦海軍航空隊、金谷航空隊
昭和18年(1943)3月27日	空母隼鷹でトラック島の春島へ到着
12月12日	戦艦大和に乗船、トラックを出港
12月17日	戦艦大和、横須賀へ入港
昭和19年(1944)5月6日	隼鷹で大分県佐伯湾を出航
6月14日	フィリピン諸島中部ギマラス泊地に入港
6月19日	マリアナ沖海戦に隼鷹で機動艦隊として参戦
7月3日	沖縄中城湾から呉軍港に入港
12月7日	東南海地震 M8.0 中島飛行機山方工場倒壊
12月10日頃	中島飛行機半田製作所へ
昭和20年(1945)3月頃	松山飛行場へ 天山を沖縄へ送る
4月頃	中島飛行機半田製作所へ戻る
8月15日	正午、玉音放送 終戦
8月17日	東栄へ帰還